

# 国文研ニュース

No.61 SUMMER 2022



『見立百化鳥』

## 目 次

### ●メッセージ

創立50周年を迎えて ..... 渡部 泰明 1

### ●研究ノート

【基幹研究】地方協創によるアーカイブズ保全・活用システム構築に関する研究 ..... 西村慎太郎 2

国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクションの基礎的研究について ..... 綿拔 豊昭 3

### ●エッセイ

寺院調査と文学研究 ..... 近本 謙介 4

共同研究の場の豊かな学び ..... 後藤 博子 6

### ●トピックス

100年へのエントランスー「法人第4期」の国文研スタートー ..... 入口 敦志, 神作 研一 8

国文学研究資料館創立50周年記念式典・講演会・展示 ..... 西村慎太郎 10

大衆文化の今昔物語ー日本古典籍セミナー北京2021ー ..... 劉 嘉璐 12

ないじえる芸術共創ラボ アウトプットイベント4件 ..... 黄 昱 13

2021年度のアーカイブズ・カレッジを顧みて ..... 加藤 聖文 14

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 ..... 齋藤真麻理 14

## 創立 50 周年を迎えて

渡部 泰明（国文学研究資料館長）

国文学研究資料館の創立50周年にあたりまして、ご挨拶を申し上げます。このたび皆様の温かいご支援によって、式典や講演会、展示等さまざまな記念の行事を執り行うことができましたことに、心より御礼申し上げます。

当館は、50年前に設立されました。日本の古典に関する資料を収集・保存し、文化資源として将来にわたって活用できるようにすることを目的とし、基幹事業である文献資料の調査・収集を実施するとともに、収集した資料による共同研究を推進するなど、日本文学およびその関連領域の中核的な拠点研究機関としての役割を果たして参りました。

2014年度から2023年度までの10年間の計画である「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」において、当館が中心となり、国内外の大学、研究機関と連携して、古典籍約30万点の全冊画像化を行い、研究基盤として「新日本古典籍総合データベース」を作り、その画像データを用いて国際的な共同研究のネットワークの構築を進めました。

さらに、本2022年度からは、館内に古典籍データ駆動研究センターを設置し、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」の後継計画である「データ駆動による課題解決型人文学の創成」プロジェクトへと動き出しました。日本の古典遺産をあらゆる人に向けて開き、自由かつ有効に利活用してもらえるようにし、新たな人文学の誕生に寄与することを願っています。

50年前といえば、大学の意味、研究の持つ意味が、激

しいほどに問われていた時代にほかなりません。当館の設立もそれと無関係であったはずがありません。学問を、研究資源や研究方法を含めて、広く研究者に、市民に、そして世界に開かれたものにするという当館の志は、結果的に、学問の社会的な意義とは何ぞやという問いに答えていこうとしたものであった、ということができるでしょう。もちろん、その問いへの答えは、ますます厳しく問われています。そして折しもデジタル化の時代を迎えたことによって、社会に向けて開いていくという私どもの理想はいっそう明確に実現されていくことと確信しております。

当館設立10周年を記念して発行された『十年の歩み』という冊子の中で、勇退されたばかりの市古貞次初代館長は、インタビューの終わりにこう述べられています。摘記すると、「みんなの力で建てたということが原点で、国の内外を問わずあらゆる日本文学の研究者の利用に供するということ、これはやはり皆さんの念頭に置いていただきたいと思います」「また利用だけでなく資料の提供についても必要があると思うので、国文学者全体の協力で、この資料館を大きく育てていってほしいと思います。館内の人はそういう国文学界の総意を受けて实际的に処理するのだ、そして一緒に壮大な国文学の殿堂を築くのだという考えで、これからの難局を切り抜けていただきたいと思いますね」。その志を、改めて胸に刻みたいと思います。

最後に皆様に今後とも相変わらぬ御指導、御支援をお願い申し上げます、御挨拶といたします。



（左）品川区戸越時代の当館（昭和57年撮影）、（右）立川市の当館（現在）

## 【基幹研究】地方協創によるアーカイブズ保全・活用システム構築に関する研究

西村 慎太郎（【基幹研究】地方協創によるアーカイブズ保全・活用システム構築に関する研究（研究代表者）、国文学研究資料館教授）

本研究は、2019年度から2021年度の基幹研究で、地域社会の持続に資し、地域住民とともに研究者や資料保存機関、行政が地域のアーカイブズを保全・活用する方法論を考案するため、地方国立大学で推進されている「産学協創」に着目し、アーカイブズ学を地域貢献に結び付ける新たな研究の地平を目指した。とりわけ、地域博物館・図書館・文書館などとともに、住民・学生参加型の資料整理と資料分析を実現し、国文学研究資料館蔵資料を地域資料と結び付けて地域のために活用することを試みた。

この研究では、長野県長野市松代地域を中心として北信地方を事例として進めた。北信地方は、都市圏である長野市を中心としつつ、「平成の大合併」を受けずに北信広域連合を構成する中小規模の自治体が多い。地域住民と研究者とで民間所在資料の保全・活用を進め、栄村歴史文化館「こらっせ」を開館した栄村のように、協創関係による地域持続を見据えた先進例もある。真田宝物館の文書・典籍・武具などはその質量ともに最大級の大名資料コレクションであり、当館所蔵歴史資料の中で最大である真田家文書は6万点に及んでいることを踏まえれば、いまだに松代藩域の民間に遺されている膨大な文化資源を合わせて保全・活用することは地域貢献に直結する。

加えて、従来のアーカイブズ学においては出所単位に文書研究が行われてきた。しかし藩という行政組織と藩主文書、家臣の家文書、城下町町人の家文書や地方文書の文書などは、文書の作成・使用・管理という文書実践の全過程にわたって相互関係性を有するため、松代藩内の関係性に注目したアーカイブズ研究を進めることとした。

そこで、当館蔵の松代藩関係の古文書や真田宝物館蔵真田家文書の調査を行いつつ、長野市の学芸員や住民30名を当館に招いた「松代古文書勉強会の国文学研究資料館視察と交流会」を2019年12月5日開催し、さらには真田宝物館で筆者による講演会「地域における古文書の保全・活用の可能性 ―地域の人びとと共有する歴史と歴史資料保全―」を2020年2月29日に開催して、冒頭の研究課題を深化させていった。同時に、2019年の台風19号水害で罹災した長野市内の歴史資料保全活動は信州資料ネットが救出し、現在は長野市立博物館で保管されているが、その保全作業を主に渡辺浩一当館教授が学生を率いて協力している。

しかし、2019年度末から新型コロナウイルス感染拡大

防止のため、大規模なイベントができなくなってしまい、「地方協創」が困難な状況となった。なんとかして、長野市の地域博物館・図書館・文書館などとともに、住民・学生と当館との関係を途切れさせないために、松代藩領域の古文書の資料紹介を週に1度YouTubeで配信することにした。全50回で延べ5724回の視聴を得た。必ずしも多い視聴回数ではなかったものの、2020年11月17日に長野市松代町で開催した「はじめての古文書講座 ―松代の古文書と歴史を学ぶ―」の参加者からも視聴することで古文書やくずし字の勉強になっているという意見があり、一定の意味があったものと思われる。長野県立科町で開催予定だったワークショップ（立科町主催）も2021年は見合わせざるを得なかったものの地元ケーブルテレビを用いた講演会形式としたことで、インターネットを利用しない地域の人びとに対して成果報告を行った。インターネットによる配信は重要であるが、ネットが十分活用できない、あるいは環境が十全としていない地域では、現状としてケーブルテレビはとても有効なメディアであろう。

長野市内での活動が十分にできない中、東京電力福島第一原子力発電所事故の被災自治体である福島県双葉郡大熊町とは、教育委員会職員や住民、そして外部の学芸員とともに歴史資料の保全活動を行った。付言すると、現在では帰還困難区域の解除が進められているために解体除染が進み、多くの歴史資料の散逸が急激に進んでいる。原子力災害被災地域は、国家権力と政権与党が掲げる「創造的復興」によって原子力災害以前のコミュニティをスクラップにして天地創造を試みられており、景観も含めたあらゆる歴史資料が散失している。その中のわずかな痕跡を自治体職員・住民とともに保全でき、その成果を「福島県大熊町における複合災害帰還困難区域の歴史資料保全 ―自治体や地域住民との地方協創―」として2020年12月6日の総研大文化フォーラムのポスター発表として公表することができた。

この3年間、コロナ禍のために十分な研究の「地方協創」を進めたとはいえないが、多くの成果や新しい試みを行えたものと自負している。そして、研究の「地方協創」は複雑かつ難解な地域の歴史やアーカイブズを住民と共有するための社会運動に結実するものと思われ、引き続き、模索していきたい。



## 国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクションの基礎的研究について

綿拔 豊昭(【特定研究(課題)】国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクションの基礎的研究(研究代表者)、筑波大学図書館情報メディア専攻長; 教授)

まず本共同研究の背景について述べる。第二次世界大戦後、連歌研究の中心にいた研究者の一人である木藤才蔵(大正4年(1915)～平成26年(2014))旧蔵本のうち、国文学研究資料館の所蔵となった連歌資料は、連歌研究において極めて貴重な資料でありながら、個人蔵であったため、多くの研究者には利活用されていなかったものである。しかし、国文学研究資料館の所蔵となり、連歌研究発展のために、その利活用が期待され、その基盤整備のために、基礎的情報の提供等が待たれている。

そうした背景のもと、本共同研究の目的は、第一に国文学研究資料館所蔵「連歌資料コレクション(木藤才蔵旧蔵)」(53点)の解題を作成することにある。

本共同研究の構成員は、綿拔豊昭(筑波大学・図書館情報メディア系・教授 \*研究代表者)、浅井美峰(お茶の水女子大学・人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻(国際日本学領域)・博士後期課程)、川上一(慶應義塾大学大学院・文学研究科・後期博士課程)、川崎美穂(慶應義塾大学大学院・文学研究科国文学専攻・後期博士課程)、時田紗緒里(苫小牧工業高等専門学校創造工学科総合人文科学系・講師)、神作研一(国文学研究資料館・研究部・教授 \*館内担当者)の6名である。

本共同研究は、国文研所蔵木藤才蔵コレクション53点を、構成員に割り振り、各自が担当資料について解題を執筆することによって、資料の利活用に向けた基盤整備をするという方法をとった。

本共同研究において特記する点をまずあげたい。以下の3点である。

まず構成員が若手中心であったことに配慮し、コロナの感染対策を講じつつ、数回にわたって資料縦覧の機会を設け、代表・綿拔を中心として、全員で、連歌書の特質を共有することを心掛けた。

第2に、福田安典日本女子大学教授に、日本女子大学日本文学研究室所蔵木藤コレクションの縦覧のみならず、本共同研究を推進する上で折々に貴重な御指導と御助言を賜った。

第3に、連歌俳諧史研究の専門とされる深沢眞二和光大学名誉教授に、特別参加していただき貴重な御指導と御助言を賜った。

本共同研究の活動は以下のとおりである。

### 【研究会】

- ◎ 第1回共同研究会 2021年5月21日(金) 15時～17時  
オンライン ZOOM  
顔合わせ、研究代表者の選出(綿拔豊昭)、研究計画の

共有、執筆担当書目の確定、研究費(10万)使用に関する説明と注意などがなされた。さらに、長谷川千尋京都大学教授(ゲストスピーカー)の講演「連歌の文献学的研究をめぐる」を聴講した。

- ◎ 第2回共同研究会 2021年9月3日(木) 11時～16時  
国文学研究資料館オリエンテーション室  
木藤才蔵コレクションを縦覧した。
- ◎ 第3回共同研究会(関連調査) 2021年11月19日(金) 13時～17時 日本女子大学日本文学研究室  
福田安典日本女子大学教授の導きのもと、宮本祐規子白百合女子大学准教授・深沢眞二和光大学名誉教授も参加して、日本女子大学日本文学研究室に所蔵される木藤才蔵旧蔵書(41点)を縦覧した。
- ◎ 第4回共同研究会 2021年12月17日(金) 14時～17時  
国文学研究資料館オリエンテーション室  
木藤才蔵コレクションを再度縦覧。各自作成の「解題」原稿との照合を行った。深沢眞二氏が特別参加された。
- ◎ 第5回共同研究会 2022年3月23日(水) 13時～17時  
国文学研究資料館オリエンテーション室  
木藤才蔵コレクションを縦覧した。各自が「解題」原稿を仕上げた。深沢眞二氏が特別参加された。なお綿拔が「新式今案歌」について講じた(この内容等に関しては、綿拔「小松天満宮所蔵『新式今案歌』について」『国文学研究資料館紀要 文学研究篇(48)』2022年3月、に掲載)。

最後に本共同研究の研究成果の公開予定等について記す。

- (1) 連歌俳諧史研究者の深沢眞二氏も加わり、構成員とあわせて都合7名の連名で「国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクション解題」を、俳文学会の機関誌『連歌俳諧研究』143号(2022年9月刊行予定)に投稿予定である。なお、紙幅の制限があるため、内容は大幅に削減している。
- (2) 内容を削減していない「解題」については、2022年度に小冊子(共同研究成果報告書)として刊行するとともに、後年度に国文学研究資料館のWEB上にUPする予定である。
- (3) 国文研所蔵木藤コレクションの要点に関して、2022年6月25日開催予定の俳文学会東京例会(於)江東区芭蕉記念館にて、全員で研究発表する予定である。

末尾ながら、本共同研究を進めるにあたって、ご指導を賜わるなどした福田安典、深沢眞二、長谷川千尋の各氏には、感謝と御礼を申し上げる。

## 寺院調査と文学研究

近本 謙介（国文学研究資料館学術資料委員会委員、名古屋大学大学院人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター教授）

日本は、奈良時代以来の典籍を千年以上にわたって継続的に保有する、世界的にも稀有な文の国です。そうした典籍を文庫としてもっとも豊かに現代に伝えるのが寺院経蔵の世界であり、普遍的価値を有する宗教遺産として、後世に伝えていくべきかけがえのない人文知の宝庫といえます。このことは、国文学研究に携わる方々にはいまでも言挙げするまでもないのですが、専門を異にする研究者や学生たちからは、意外な事実として受けとめられることも多いように思います。文学研究者がやや苦手とする（ように感じられる）自己アピールの不足もそれを助長しているのでしょう。日本の宗教を専門とする米国の研究者による、世界に伝存する前近代の写本の分布における日本の占める位置の大きさの発表などに接するにつけ、昨今の学術のありかたのなかで萎縮しがちな人文系が、胸を張りつつ自負をもって進むべき方向性を再確認させられます。

先駆的に進められてきた高山寺・醍醐寺等の継続的な調査と成果報告による学恩の多大であることは贅言を要しませんが、近年の寺院聖教調査の飛躍的な進展には目を見張るものがあり、その対象は奈良や京都の中核的拠点寺院のみならず、諸地域の寺院にもひろがりを見せています。それらの研究成果の統合等も、模索されるべき環境が整いつつあると感じています。

名古屋大学では、真福寺宝生院大須文庫の調査を継続的に進めています。この調査は、阿部泰郎氏（名古屋大学名誉教授・現龍谷大学教授）が在職中より進めてこられたものであり、その成果は、『真福寺善本叢刊』第1期12巻・第2期12巻（国文学研究資料館編、臨川書店、1998～2012年）等として結実しています。



『真福寺善本叢刊』第1期・第2期全24巻  
(1998-2012)

この調査の一部は、国文学研究資料館による文献調査と連動し、マイクロフィルム撮影も行われました。個々の大学が継続的に取り組む寺院調査と国文学研究資料館の事業とが有機的に結びつき、共同利用研究機関としての国文学

研究資料館を通じて、その成果が共有・発信される貴重な事例です。現在の学術の方向性として、諸々の調査成果のデジタルアーカイヴ化が課題となっていますが、継続的な運用と管理を考えた場合に、国文学研究資料館が担う役割は多大であると思います。大学を基盤とする調査は、所属教員に負うところが大きいというのに、人員の補充がままならない場合も多い現状は、調査結果と成果の継承と保全に支障をきたすことにもつながるでしょう。そのような状況に鑑みると、典籍の所蔵者・大学・国文学研究資料館の相互信頼に基づく協調関係は、これまで以上に緊密に築き上げられていくべきであると感じます。国文学研究資料館が推進している日本古典籍研究国際コンソーシアムの活動も、上記の点を有益に活用・展開するハブとしての機能につながるのではないかと期待するところです。

近代以降の大須文庫調査では、昭和4年（1929）～10年（1935）にかけて黒板勝美氏（東京帝国大学）を中心に行われた整理作業をもとに、全典籍を網羅した「大須文庫目録」が唯一の悉皆目録として完成され、現在に至るまで分類番号等の規範となっています。この悉皆目録から得るところは計り知れませんが、一方で現在の調査からすると必ずしも十分でない点があることも否めません。現在の名古屋大学による調査では、善本の紹介に向けての作業も継続しつつ、合計15000点を超える典籍（国宝4点、重要文化財37点を含む）の、完備された悉皆目録の完成を目指しています。

真福寺の旧地が長良川と木曽川の落ち合う大須（現在の岐阜県羽島市）であり、徳川幕府によって尾張城下に移転せしめられたことを知らない地元の学生たちも多いようです。この移転は、洪水等による聖教の損失を防ぐことが目的であったと考えられていますが、それら聖教のうちの一点として国宝『古事記』のあったことは著名です。上中下巻が完備し、南北朝期の写本である『古事記』（1371～1372年、賢瑜書写）は、真福寺第二代信瑜による一連の書写活動とかかわる所産と見做されます。信瑜は、東大寺東南院聖珍法親王に仕え、多くの貴重な聖教・典籍・記録等を書写・伝受し、真福寺に伝えました。初代の能信が真言密教小野三宝院流の三法流（慈恩寺流・安養寺流・武蔵流のいわゆる大須三流）を受法し、真福寺を尾張地域有数の真言教学の拠点寺院としたのに続き、信瑜が三論・真言の本所としての東大寺東南院由来の典籍をもたらしただことで、顕密を併せ備えた有数の道場へと真福寺を飛躍させます。東大寺東南院（旧境内は東大寺南大門を大仏殿

に向けて入った右側。現在は東大寺本坊) がのちに退転したことを考えると、信瑜の営みは、真福寺に擬似東南院経蔵を現出せしめることにもつながったのです。

説話を中心とする仏教文学を専門とする関係からも、『日本霊異記』中下巻や往生伝7点(すべて重要文化財)を所蔵する大須文庫真福寺本は、欠くことのできない身近なアーカイヴです。東大寺東南院由来の唱導資料であり、かつ説話資料でもある『類聚既驗抄』(鎌倉時代末写)からも多くを考えさせられます。伊勢・春日関係を始めとする多くの神祇関係の説話を収載する本書には、明らかに『沙石集』・『撰集抄』・『春日権現験記絵』などの影響が認められます。無住や仮託西行の編になる説話集は、決して遁世門の枠組みからのみ捉えるべきものではないのです。また、説話の主体が複雑に入れ替わった『類聚既驗抄』と『春日権現験記絵』所収話の関係からは、鎌倉時代の南都における説話の動態を如実に窺うことができます。そもそも、『沙石集』・『撰集抄』・『春日権現験記絵』相互にも類話関係を見出すことができる点を考慮すると、『類聚既驗抄』を併せ考えることで、それらの説話・伝承がそこに収載されていることの必然性を、寺院聖教研究と説話研究の接点として定位していく道筋が見えてくるようにも思われます。

真福寺大須文庫調査を進めながら、現在は中世拠点寺院の人と知のネットワーク解明にも取り組んでいます。これは、中世以来の経蔵・文庫のすがたをとどめる拠点寺院の基盤の悉皆調査による目録・奥書集成のアーカイヴを作成したうえで、それらの横断的・統合的分析を進め、経蔵・聖教形成の過程と実態を解明し、併せてそれを成した人と知のネットワークの動態に迫ろうとするものです。一例として、真福寺と関係を有する拠点寺院に、天野山金剛寺(河内長野市)があります。真福寺には東大寺東南院とかかわる多くの聖教が信瑜を介して伝わり、顕密の聖教群が構築されていることを先述しましたが、金剛寺には、真福寺に蔵される東大寺東南院関連聖教と書写過程が兄弟関係・親子関係に当たる写本が少なからず伝存し、その多くが金剛寺学頭禅恵を介するものであることとその実態が、調査の過程で次第にわかってきました。金剛寺の聖教調査は、後藤昭雄氏(大阪大学名誉教授)の長年の継続的調査を基盤として積み上げられ、その間に『三宝感応要略録』(院政期写)を始めとする重要な成果報告が成されてきました。現在は子院摩尼院を含む悉皆調査へと展開しており、海野圭介氏(国文学研究資料館)を中心とする共同調査の成果は、

『天野山金剛寺善本叢刊』全5巻(勉誠出版、2017～2018年)として刊行されています。



『天野山金剛寺善本叢刊』第1期・第2期全5巻  
(2017-2018)

この共同研究も、個々の大学の研究者を基盤とする寺院調査と国文学研究資料館が共同で進めるモデルケースのひとつと考えることができるでしょう。多くの場合、寺院の悉皆調査とその成果報告には長い年月と労力、それを支える研究経費が必要となります。国文学関係の研究経費獲得にも競合関係は当然あるわけですが、国文学研究資料館の事業推進のための大型研究経費獲得と並行しつつ、適した規模のプロジェクトとして、経費を国文学の領域全体で確保していく関係性の構築も必要となってきたように感じます。これも文学研究者がやや苦手とすることであるかもしれませんが、人文学の隣接領域ではうまく工夫がなされている状況も見受けられます。

寺院調査は、人文知の集積された宝庫としての経蔵や文庫の形成過程や意義を解明する方向性を有するので、自ずと宗教にかかわる文学・美術・歴史等、人文学諸領域の知を結集して取り組むべきものとなります。文学研究の立場からは、唱導資料に着目することで、軍記研究や説話研究に新たな視界を開いてきた歴史があります。寺院における唱導の世界が、中世文芸に与えた影響の深さと意義についてはすでに共有されていますが、唱導資料そのものの構造分析や、寺院聖教の動態・伝播の様相を加味したうえでの研究が必要な状況であり、唱導資料研究の延長線上に立ちあがってくるはずの法会学の構築も、今後の課題と言えるでしょう。寺院調査を通じて構想しているのは、法会の総合的理解へと研究を深めるなかで、あらたな法会・唱導学を創成することです。法会は、ことば・ほとけ・図像等が交響する総体の場ではありますが、人文学諸領域の研究者との共同研究を進めつつも、やはりもっとも焦点化したいのは、法会における唱導の担ったゆたかなことばの精華としての「文学」の領域の解明です。



## 共同研究の場の豊かな学び

後藤 博子（国文学研究資料館共同研究委員会委員、帝塚山大学文学部教授）

共同研究について執筆する機会をいただき、私自身が共同研究の場で豊かな学びに恵まれた経験を書きたいと思います。と言いましても、実は私は共同研究に正式な構成員として参加したことはありません。

平成12年（2000年）に大阪市立大学大学院後期博士課程の学生であった私は、江戸の古浄瑠璃を研究テーマとしていました。大名家の江戸屋敷では浄瑠璃や歌舞伎が盛んに上演されていたことが知られ、それらの上演記録は浄瑠璃太夫の動向や演目について詳細な情報を示してくれる貴重な資料になります。武井協三氏が『弘前藩庁日記』の元禄までの演劇関係記事について、『若衆歌舞伎・野郎歌舞伎の研究』（八木書店、平成12年）に翻刻と影印を紹介され、私はその豊富な情報に夢中になって読んでいました。同年に、ある研究会の懇親会で武井氏に初めてお目にかかる機会を得て、「いろいろ教えていただきたい」という強い思いから、「上演記録についての研究会などはなさっていないでしょうか」とお尋ねしました。そのときに武井氏が計画されていたのが、平成13年度（2001年4月～2002年3月）の共同研究「大名屋敷の饗宴の研究—『弘前藩庁日記』を読む—」です。武井氏は初対面の学生の私のぶしつけな質問に対して、「ちょうど来年からの共同研究を計画してるから、オブザーバーとして参加してくれてもええよ」とおっしゃってくださいました。

この共同研究の構成員を当時のご所属とともに記載させていただきます。研究代表者が渡辺憲司氏（立教大学文学部教授）、共同研究者が青木直己氏（株式会社虎屋・虎屋文庫課長）、加賀佳子氏（元・川村学園女子大学非常勤講師）、阪口弘之氏（大阪市立大学大学院文学研究科教授）、林公子氏（近畿大学文芸学部助教授）、大友一雄氏（国文学研究資料館史料館助教授）、武井協三氏（国文学研究資料館研究情報部教授）でした。『弘前藩庁日記』が演劇のみでなく、近世文化全般にわたる好資料であるとの見通しから、江戸時代の文学・学芸・演劇・美術・政治・食文化などに業績を有する専門家に参加が呼びかけられ、多彩な分野の研究者が集結する共同研究となっていました。

これほどの豪華メンバーの共同研究の場にオブザーバーという名の「もぐり」で参加させていただけたことは、私にとって本当に大きな幸せでした。国文学研究資料館で平成13年度に3回の共同研究会が実施され、1回は2日間に

わたり2名の研究発表が行われました。平成13年度「共同研究報告書」（国文学研究資料館、平成14年5月）によって、表題と発表者を次に示します。

- 6月12日 武井協三氏  
「『弘前藩庁日記』について」
- 6月13日 加賀佳子氏  
「津軽家上屋敷における芸能上演の時間、家臣の役割など」
- 10月25日 青木直己氏  
「座敷芝居に見る食—菓子を中心に—」
- 10月26日 林公子氏  
「座敷芝居と劇場の芝居—「嫁鏡」の上演をめぐって—」
- 1月29日 大友一雄氏  
「近世武家社会と能・將軍宣下能と祝宴の構造・「御鷹之鳥」の振舞と能」
- 1月30日 鈴木（後藤）博子  
「座敷芝居上演記録から見た土佐少掾」

共同研究報告書には「近世文学、近世演劇、近世史など、ジャンルを越えた研究者が参加した。これによって『弘前藩庁日記』の様々な文化史的意義を摘出するのが本共同研究の目的であった」とあります。研究会では、『弘前藩庁日記』という資料からどのような情報を引き出すことができるのか、資料の扱い方、調査方法、分析のしかたはもとより、専門分野における研究の進め方までが、発表を通して具体的に示されました。各分野の専門的な研究によって様々なことが明らかになり、質疑も大いに盛り上がりました。私はその場にいて、ただただ聞いているだけでしたが本当に楽しく、豊かな学びに満ちた時間にワクワクし通しだったことを覚えています。

当時の私は「江戸の古浄瑠璃」という研究テーマに取り組むのに精いっぱい、同じ近世演劇である歌舞伎についてすら、研究対象とすることに恐れを抱いていました。しかし、本共同研究の場に参加させていただき、歌舞伎や学芸、近世史、食文化など、さまざまな分野の先生方の知見に接することができて、少しずつ研究を広げていく勇気がわいてきました。先生方から直接ご指導いただき、研究スキルが

一段も二段もアップしたような実感もありました。そうして、加賀藩前田家や岡山藩池田家の藩政史料について調査し始め、金沢市図書館や岡山大学附属図書館に所蔵される日記類から、演劇関係記事を見出すに至りました。

本共同研究は、平成14年度～平成16年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号14510480）を受けた「大名屋敷におけるサロン文化の研究」（研究代表者・武井協三）に展開しました。私はこの研究会にも引き続きオブザーバーとして参加させていただき、平成14年9月26日には「池田家・前田家記録からみた『弘前藩庁日記』の芸能記録について」という表題で報告しています。平成13年度の共同研究の場で先生方から育てていただいたことが、翌年に成果となってあらわれた発表だったと思います。こうして振り返りますと、研究者としての自分があるのは、本共同研究のおかげだと改めて感謝でいっぱいになります。共同研究の場が若手を成長させる機能を持っていたことを示す文章として、科学研究費補助金の研究成果報告書（平成17年3月）から武井氏の「研究成果一序にかえて」を引いておきたいと思います。なお、この研究成果報告書には研究発表と討議のテーブル起こしが収録されています。

研究発表は、それぞれ新見が満載されたものであり、それについての討議も、実に学問的刺激に満ちていた。共同研究の面白さを実感する時間だったと言えよう。共同研究の実を上げ得たのは、参加者それぞれの充実した予習蓄積があったからである。若手の研究協力者（オブザーバー）たちの、本資料解読にむけた情熱と豊かな勉強量が、この共同研究のレベルの向上に資したことは、特筆に値するだろう。キャリアを積んだ研究分担者の見識が、これらの研究発表についての討議の質を保証した。

大阪在住の学生という立場から見ても、東京の国文学研究資料館で資料に触れ、関西以外にいらっしゃる先生方の指導を受け、さらに多彩な分野の研究者の知見に接することができる共同研究は本当に貴重で豊かな学びの機会でした。国文学研究資料館の共同研究だからこそ可能だったと言えるでしょう。資料を収集して提供してくださる環境の整備はもちろんですが、全国の研究者の連携、異なる時代を専門とする研究者の交流、歴史や文化史、美術史などジャンルをまたがる研究者との協力関係といった、つながりの

構築も国文学研究資料館が果たしてきた重要な役割だと思います。

個人的な話に戻って恐縮ですが、私は上記の共同研究の場に参加させていただいたことがご縁となって、平成17年度（2005年度）から3年間、日本学術振興会特別研究員として国文学研究資料館で武井協三先生のもと、研究することができました。国文学研究資料館は、ふだん学会などでは接することのない、専門の時代が異なる研究者が集まっているという点も強みだと思います。諸先生からさまざまなご教示をいただきましたし、中古文学や中世文学を専門とする同世代の研究仲間にも恵まれました。

国文学研究資料館で実施される共同研究や研究プロジェクトの研究会に、これまた「お手伝い」として参加させていただくこともしばしばでした。平成18年度（2006年度）のダニエル・ストリューブ氏を研究代表者とする招聘外国人共同研究「井原西鶴と中世文学」の研究会では、全国の西鶴研究者の方々が集まって充実した討議をされているのを拝聴しました。計3回の研究会を通して西鶴の魅力を教えていただいたことが、現在、教員として学生との演習で西鶴作品を取り上げることにつながっています。

「本文共有化の研究」プロジェクト（平成16年度～平成18年度）の研究会では、国文学研究に有用な本文提供を目的としてデータベースを作成していけるプロセスの一端を拝見しました。「近世文芸の表現技法〈見立て・やつし〉の総合研究」プロジェクト（平成16年度～平成18年度）の研究会では、浮世絵を中心に文学や芸能、歴史など多岐にわたる分野の研究によって、日本文芸の表現技法について多角的に明らかになっていく経緯に触れることができました。

近年の共同研究では、若手研究者が構成員として参加される機会も増えていきます。共同研究は、貴重な資料を対象にキャリアを積んだ研究者がリードして共に研究を進めることによって、若手研究者が面白さ、楽しさを実感しながら研究スキルを磨いていく場になりうると思います。コロナ禍で、資料を直接調査することや集まって研究会を実施することは難しい状況が続いていますが、オンラインでの研究会といった新たな取り組みには、距離を飛び越えたつながりを生む可能性があるのではないかと期待を寄せています。共同研究への若い方々の参加が今後ますます進むことを願っております。



## 100年へのエントランスー「法人第4期」の国文研スタートー

1972年5月に品川区戸越の地で創設された国文学研究資料館は、本年2022年に創立50周年を迎えました。

去る5月13日（金）と14日（土）には記念式典および記念講演会がオンラインで開催され、大勢の皆さまに御視聴いただきました。このことにまず、心より感謝と御礼を申し上げます。50周年のこの機に、原点を見つめ直しつつ、渡部泰明館長以下教職員一同、次の50年を見据えて種々の準備を重ねる決意を新たにしています。

国文研は、国立大学法人法（2003年）に基づいて、2004年に大学共同利用機関法人のもと人間文化研究機構の一基盤機関として位置づけられ、爾来6年をワンクルールとする「中期目標・中期計画」のもとに、絶えず自己検証と外部評価を受けながら着実に歩みを進めてきています。2022年度は、創立50周年とともに、「法人第4期」（2022～2027年度）の初年度という節目の年に当たりますので、今ここに国文研の現在地を確認し、遙けき100周年に向けての将来への道筋を皆さまと共有したいと思います。

\*

\*

国文研は、国内各地の日本文学とその関連資料を大規模に集積し、日本文学をはじめとするさまざまな分野の研究者の利用に供するとともに、それらに基づく先進的な共同研究を推進する、日本文学の基盤的な総合研究機関です。大学共同利用機関としての最重要課題は学術コミュニティにおける共同利用・共同研究であり、これまでも、基幹事業である調査収集事業とそれを踏まえた共同研究を、いわば車の両輪として鋭意実施してきました。

2014年度からは、10年計画で大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（略称「歴史的典籍NW事業」）が走り出し、国公私立大学をはじめとする古典籍所蔵機関の協力を得ながら大量のデジタルデータを集積しています。2023年度中には、『国書総目録』（岩波書店刊）を継承発展させた「日本古典籍総合目録データベース」と、歴史的典籍NW事業が生み出した大量の画像を有する「新日本古典籍総合データベース」を統合すべく、現在急ピッチで準備を進めています。各種共同研究の成果としての「解題」も、「国立国会図書館デジタルコレクション」の

ように画面上で視認できれば、日本文学研究者はもちろんのこと、それを超えて広く古典籍が人類の重要な文化資源として利活用されてゆく機縁にもなるでしょう。

以下、具体的に8項目を立てて、それぞれの概要をごくごく簡潔に記します。

### ◆日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画

人文社会科学系で唯一、文部科学省の「大規模学術フロンティア促進事業」として採択され、2014年度より推進してきた本計画も本年で10年計画の9年目。いよいよゴールが近づいてきました。山本和明NWセンター長の統括のもと、古典籍30万点のデジタル化とそれを踏まえた国際共同研究ネットワークの構築は佳境に入り、オーロラ・防災減災などの文理にわたる異分野融合共同研究や、検索機能高度化のための各種研究開発系共同研究をはじめとして、多様な研究成果を生み出しつつあります。古典籍30万点を擁する大規模画像データベースは、日本文学領域のみならず、医学・理学等あらゆる領域の画像を含んでいることから、人文科学以外の研究者との異分野融合研究を醸成する研究基盤として今後いよいよ重要なエンジンになるとともに、オープンアクセスの利便性によって、国際共同研究をはじめとする新たな研究の展開に重要な役割を果たしてゆくものです。

### ◆データ駆動による課題解決型人文学の創成

歴史的典籍NW事業で培ってきた種々にわたる学問的知見を深化継承発展させるために、その後継計画として「データ駆動による課題解決型人文学の創成」を準備しています。画像作成の対象とする守備範囲を明治時代まで拡張し、これまで集積してきた古典籍データを機械可読型に転換整備、古典籍に関わる諸情報を広く社会科学や自然科学の研究者にも開いて共同研究を推進します。それらの多様な研究成果を国文研のデータインフラストラクチャーに蓄積することによって「循環型の仕組み」を構築し、人文科学の研究者が他分野と協働して、現代社会に存在するさまざまな課題の解決に寄与する、課題解決型の人文学を創成することを目的とするものです。本計画は、日本学術会議による「マスタープラン2020」に選定されたのち、文部科学省の「ロード

マップ2020」(2020年9月24日)に策定され、ただいま国文研の総力を結集してその予算化に向けて尽力しているところです。

#### ◆古典籍データ駆動研究センター

大規模古典籍データを永く安定的に提供し、さらにこれを基盤として日本文学はもちろん多様な領域の新研究を推進してゆくために、本年2022年4月1日に、国文研内に「古典籍データ駆動研究センター」を新設しました(略称は「DDセンター」。Data Drivenに基づきます)。情報・システム研究機構国立情報学研究所の大山敬三所長補佐をDDセンター長に迎えて、海野圭介副センター長とともに、国文研の今後のデータ戦略を担うとともに、上記「データ駆動による課題解決型人文学の創成」推進のための心臓として機能します。

#### ◆調査収集事業

国内外の古典籍所蔵機関の御協力を得て、国文研が設立当初から50年にわたって営々と続けてきた「調査収集事業」は、現在も、種々のデータの基盤を構築する国文研の基幹事業です。日本文学の学術コミュニティ(地域資料専門部会委員)との協働による地道な書誌調査こそ文献学的・書誌学的研究の土台にはかならず、学の基盤として極めて重要なものです。豊かな経験値を持つ全国各地の研究者を中心として、適宜若手研究者の参画を促し人材育成の観点をこれまで以上に重視しながら、この基幹事業を今後も粘り強く継続展開していきます。

#### ◆共同研究

国文研が所有する各種データを研究資源として、多様な共同研究を推進しています。2022年度からは新たに、「特定研究」のもとに3種(「近代」「地域資料」「国際」)計7件の共同研究を立てました。特に「地域資料」の5件は、全国の調査収集先の中から5か所を選定し、当該文庫に精通した研究代表者が、調査収集事業を担ってきた各地域の地域資料専門部会委員を中心として研究分担者を組織して行うものであり、「事業から研究へ」という一連の流れを創出する重要な共同研究と位置づけています。研究組織は、(調査収集事業と同様)若手研究者の参画を促し人材育成の観点を重視します。なお、法人第4期に人間文化研究機構が推進する共同研究にも、国文研主導の2件―「異分野融合による総合書物

学の拡張的研究」(研究代表者木越俊介)、「日本・パチカン関係史のアーカイブズ学的研究」(研究代表者加藤聖文)―が走り始めました。

#### ◆国際連携

2017年に「国際連携部」を設置して、日本文学をめぐる国際交流活動を強化しています。去る5月に開催した「国際日本文学研究集会」は本年で第45回を迎え、海外機関との学術交流協定はコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所をはじめとして現在19機関に及んでいます。2020年には「日本古典籍研究国際コンソーシアム(Global Consortium for Japanese Textual Scholarship)」を設立、事務局として国内外82機関と歩み始めました。国内外からの要請を受け、「書誌学用語勉強会」などの活動を積み重ねているところです。

#### ◆資源活用・社会連携

国文研の多様な活動を、様々なメディアを駆使して社会に広く発信しています。モバイル展示などを活用し、館内にとどまらない普及活動も活発に行っています。

2017年に文化庁の「戦略的芸術文化創造推進事業」を受託して始まった「ないじえる芸術共創ラボ」の活動は、その後文化庁の「日本博」などと連携しながら、AIR・TIRとともに充実した活動を展開しています。また、多摩信用金庫との協定に基づいて設立した多摩学術文化プラットフォーム「ぷらっとこくぶんけん」においても、多摩地域の自治体や企業と連携した活動を行い、国文研の研究成果を広く発信することに努めています。

#### ◆総研大

国文研を基盤機関として、総合研究大学院大学文化科学研究科日本文学研究専攻において大学院教育を担っています。齋藤真麻理専攻長のもと、充実したカリキュラムと指導体制を用意して、人材育成に注力し、海外で教鞭をとる国際的に活躍する研究者も現れています。

\*

\*

ただいま開催中の特別展示「創立50周年記念展示 こくぶんけん〈推し〉の一冊」は、8月31日まで開催中です。コロナ対策のために(月)(水)(金)のみの開室。事前予約制で御不便をおかけしますが、どうぞ御観覧下さい。

副館長(企画調整担当) 入口 敦志  
(研究担当) 神作 研一

## 国文学研究資料館創立 50 周年記念式典・講演会・展示

1972年5月1日に国文学研究資料館が品川区戸越の文部省史料館の地に創設されて、2022年で50年が経ちました。2022年は国文学研究資料館の記念すべき年として式典・講演会と特別展示を開催することになりました。簡単にこれらの諸事業についてまとめたいと思います。

2022年5月13日に創立50周年記念式典を開催しました。13時30分から開催した式典は新型コロナウイルス感染症蔓延防止のため、オンライン（当館公式YouTubeによるライブ配信）で行うこととなりました。大会議室をライブ配信用の会場として、司会（西村慎太郎）と渡部泰明館長の挨拶以外は全て動画配信です。

最初に人間文化研究機構本部暢子機構長と渡部館長から挨拶がありました。次に池田貴城（文部科学省研究振興局長）・清水庄平（立川市長）・八木敏郎（多摩信用金庫理事長）・ハルオ・シラネ（コロンビア大学教授）、ジャン＝ノエル・ロベール（コレージュ・ド・フランス教授）各氏から祝辞を頂きました。

次に以下の基調講演と8名の講演を行いました。

### ● 基調講演

田渕句美子（早稲田大学教授）『百人一首』と『百人秀歌』をめぐって

### ● 講演

- ①小林一彦（京都産業大学教授）「ほんの枕を一古典籍の「もてなし」「あひしらひ」から—」
- ②齋藤希史（東京大学教授）「第四室のころ — デジタル調査事始め」
- ③片岡龍峰（国立極地研究所准教授）「日本の古典籍によるオーロラ研究」
- ④小荒井衛（茨城大学教授）「歴史的アプローチと理工学的アプローチを組み合わせた防災研究」
- ⑤クリスティナ・ラフィン（ブリティッシュ・コロンビア大学准教授）「ポストコロナの交流、研究、教育と国文学研究資料館の展望」
- ⑥ユディット・アロカイ（ハイデルベルク大学東アジア研究センター教授）「研究と教育ツールとしての「日本のデジタル文学地図」」
- ⑦滝澤みか（青山学院大学准教授）「軍記物語の読みの変遷 — 『保元物語』『平治物語』を通して—」
- ⑧河村瑛子（京都大学准教授）「ことばの研究のこれ

からを考えるために — 古俳諧研究の立場から—」  
講演のコンセプトとしては、①②は国文研の調査収集活動・共同研究に協力して頂いてる研究者から古典文学分野と近代文学分野から2名の研究者、③④⑤⑥は「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に協力頂いている4名の研究者、⑦⑧は国文研のこれからの50年を考えてもらうため若手の2名の研究者の講演を行いました。

式典の翌日5月14日に国文学研究資料館創立50周年記念講演会を開催しました。記念講演は以下の2名でした。



2008年立川市に移転。写真は建設途中の現在の国文研



式典館長挨拶



式典会場全景





記念講演 館長



記念講演 林望氏



展示室入口



展示室全景

①渡部泰明（国文学研究資料館長）「雲は美しいか  
—日本語の美意識」

②林望（作家・国文学者）「『徒然草』を読む楽しみ」

さらに、5月13日から8月31日に展示室において特別展示「創立50周年記念展示 こくぶんけん〈推し〉の一冊」を開催しています。特別展示は3部構成になっている、第一章「〈推し〉の一冊」では当館に属している日本文学、歴史学およびアーカイブズ学、情報学研究者が「推し」とする館蔵の作品を紹介するコーナー、第二章「国文研をひらく」では「自然を味わう」「あの人が書いた文字」「挿絵を楽しむ」「書物で国際交流」「古典と旅をする」「古典で遊ぶ」「今年記念を迎える本」のテーマに則したコーナー、第三章「国文研のこれまでとこれから」では当館の歴史にまつわる資料と写真のコーナーとしました。展示室内には当館を紹介する動画（7分）をはじめとして、第一章「〈推し〉の一冊」を各研究者が紹介する1分動画を流すモニターも設置しました。

特別展示も新型コロナウイルス感染症蔓延防止のため、事前予約制で月・水・金曜日のみの開室とし、時間も11:00から16:00まで、1グループ1時間のみの観覧で、1時間あたり最大15名までという制限を設定しました。



ふろしき



ロゴ

当然、感染症対策として、入館時の検温の実施、スタッフのマスク着用、展示室内の清掃・消毒の徹底等を行っています。

また、創立50周年に関わる事業として、ノベルティとしてのふろしきの製作と50周年記念ロゴの製作を行いました。

これらの創立50周年記念式典・講演会・展示などの諸事業をどのように進めたか、後世のために記しておきたいと思います。2021年4月14日に開催された第1回企画広報室会議（室長西村慎太郎）で議論され、その場でこれらの事業を推進するためのワーキンググループ（WG）が組織されることが決まりました。そして、第1回のWGが4月30日に開催されました。そのメンバーは入口敦志副館長、西村慎太郎企画広報室長、北村啓子准教授、糸汐里特任助教（人文知コミュニケーター）、黄昱特任助教、企画評価・広報係です。WGはオンラインで12回開催し、その他、展示内容を館長へプレゼンテーションしたのが1回（11月4日）、式典・講演会の全体打ち合わせが1回（4月27日）ありました。

これらの諸事業については館内の教職員が全員で関わってまいりました。その中でも、自画自賛と思われるかもしれませんが、全体の統括をしてきた立場として、糸特任助教と企画評価・広報係による多大な尽力があったことを述べておきたいと思います。今回の創立50年は単なる通過点に過ぎません。引き続き、当館は大学共同利用機関として日本文学および関連領域の研究に寄与していきたいと思っています。次の50年間にもご期待ください。

（西村 慎太郎）

## 大衆文化の今昔物語—日本古典籍セミナー北京 2021—

日本古典籍セミナー北京2021は2022年3月19日にオンラインで開催されました。テーマの「江戸時代の大衆文化—浮世絵・戯作・書肆—」を目にした瞬間、すぐにも拝聴したいと心惹かれました。私は古典文学の大衆化を研究しており、元より「大衆」という言葉に高い関心を抱いているからです。江戸時代という昔の大衆文化を、今日の世界的に有名な美術館と図書館のコレクションで覗けるうえに、板坂則子先生のご講演をお聞きできる幸せでわくわくしながら、ZOOM ミーティンググループに入りました。

ホノルル美術館は浮世絵版画の所蔵数が約10,000点に達し、そのうち歌川広重作品の所蔵は世界一を占めています。日本美術リサーチアソシエイトである南清恵先生が、まず浮世絵の変遷を制作様式に絞ってお話し下さいました。版本挿絵から独立したとはいえ、まだ挿絵の雰囲気や漂う墨摺絵から出発し、色が次第に増えつつ絵の質感も進化していき、遂に華やかな錦絵が誕生するに至ったプロセスは、江戸文化そのものの発達史と重なっているように思われました。主題別の紹介では、八つのテーマに分けられた浮世絵を堪能する機会を得ました。特に印象深かったのは、主人公を目立たせるために背景を一色に塗る「地潰し」と、豊かな髪の毛を一本ずつ繊細なタッチで丁寧に描き出す「毛割」であり、浮世絵の技術の高さを身に染みて感じました。最後には、初摺と後摺、版本と完成品などの違いを見比べる楽しみも教わりました。スクリーン越しながら浮世絵への鑑賞欲が掻き立てられる一時でした。

三菱第3代社長である岩崎久彌が1924年に設立した東洋文庫は、東洋学分野に特化した世界トップクラスの研究図書館です。学芸員を務めている岡崎礼奈先生は「東洋文庫の古典籍コレクション」を支えるモリソン文庫と岩崎文庫を中心に話をなさいました。モリソン文庫には旅行記、探検記、銅版画、西洋古地図、図鑑と、約45種類にも上る『東方見聞録』の刊本が蔵されています。一方、岩崎文庫には、奈良時代から昭和初期までの書籍、文書、浮世絵などが収められており、示された国宝5点と重要文化財5点の画像からは重い歴史感がひしひしと伝わってきます。「岩崎文庫の古典籍」では、珍重される古活字版の豊富な所蔵、優れた保存状態にある奈良絵本・絵巻などをご披露いただいたほか、見せて下さった江戸時代の絵入り版本、狂歌絵本、浮世絵、袋絵の数々は東洋文庫の中でも選りすぐられた貴重性の高い物ばかりで、目を肥やした満足感でいっぱいでした。

板坂則子先生のご講演では、まず「浮世絵の変遷」が

辿られました。名絵師の傑作を交えながら、黎明期、創成期、展開期、黄金期、爛熟期、開化期と、発展段階に沿ったお話は、初心者の方にも分かりやすく大変ありがたかったです。次のトピックは「戯作の変遷」ですが、正直なところ、苦手意識の強い分野でした。恐る恐る伺ってみると、「テキスト中心」と「画像中心」に書物を分けし、貴重な画像で両者の違いをリアルに示して下さいのおかげで、知らず知らず引き込まれていきました。上の二つの話題を結びつけて、先生が更に戯作者、浮世絵師と書肆の関係を話されました。浮世絵師には弟子が付いているのに対し、戯作者は殆ど一人だけで仕事をするということで、この作業の実態は文字と絵画の違いに関わっているのではないかと思います。それから、実際に組んだ戯作者と浮世絵師を三組語って下さった中で、一際印象に残ったのは、柳亭種彦と歌川国貞のコンビでした。二人は共同で合巻の人気作『偽紫田舎源氏』を世に送り出していましたが、柳亭種彦が天保の改革で絶版処分になって病没した一方、歌川国貞は当時の人気絵師になり、「歌川派の中で最も力のある派閥を築いて」いきました。二人の結末は大いに違っており、異なる成り行きの中にどんな要素が働いていたのかを探ることは私にとっての宿題でした。そのほか、『椿説弓張月』の創作を通して曲亭馬琴と葛飾北斎が互いに大きく成長したこと、為永春水と溪斎英泉が親友であったことは、仲間のありがたさを改めて認識させられるところでした。

セミナーの日より暫く経った今、思い返すとまた新しい感動や感想が込み上げてきています。文学、絵画、演劇といった多分野の交差が江戸時代の大衆文化に見られますが、それは現代の大衆文化にも共通する現象でしょう。道具こそ科学技術の発展で進化していても、それを操る人間は古今を問わず通じるころがあると思います。そして、苦難を乗り越える力が時代を異にした人々にあったからこそ、大火に見舞われた江戸から浮世絵が新風物として誕生し、安政大地震後に歌川広重が復興を願って最晩年に『名所江戸百景』を制作したのではないかと思います。北京セミナーもコロナ禍に一時影響を受けましたが、オンラインで再開して二年目に入った現在、参加人数は昨年を更に上回る200名となり、セミナー自体が大衆化しつつあるような気さえしました。毎回興味深い内容を聞かせてくれる北京セミナーが末永く続いていくよう心より願ってやみません。

(北京外国語大学北京日本学研究中心博士後期課程、  
河北農業大学外国語学院 劉 嘉璐)

## ないじえる芸術共創ラボ アウトプットイベント 4 件

「ないじえる芸術共創ラボ アートと翻訳による日本文学探索イニシアティブ」は、各界で活躍するアーティストと翻訳家を招聘し、古典籍に着想を得て新たな文化芸術的価値を創出するレジデンス・プログラム(AIR・TIR)を実施しています。2021年4月に新しいメンバーを迎えました。この一年間に行った活動の一部をご紹介します。

### トークイベント「鉢中の天 一五十三次とジオラマの景」 および企画展「ジオラマで楽しむ東海道五十三次の世界」

江戸時代に刊行された絵本『東海道五十三次 鉢山図絵』の絵を、情景作家山田卓司さんの手により見事なジオラマ作品として結実しました。2021年11月23日に、新作ジオラマの「宮」と「蒲原」をお披露目するとともに、研究者と芸術家が「鉢山」の魅力に迫るトークイベントをライブ配信しました。当館の山下則子名誉教授は『鉢山図絵』誕生の文化的背景を解説し、AIRの染谷聡さん(漆芸家)は「旅と縮景」をテーマに自身の作品と古典的思考との関連性について語りました。古典籍のデジタル化により、多様な創作活動が可能になったことを改めて認識させられた、気付きの多い内容となりました。

※各QRコードからイベントの概要および動画をご覧ください。



ライブ配信の様子。左から筆者、染谷さん、当館木越俊介准教授

関連イベントとして、たましん美術館ロビーのオープンスペースにて企画展を開催しました。前期・後期でジオラマ作品「日本橋」、「蒲原」と古典籍『鉢山図絵』の紹介パネルを展示しました。今後も地域との文化的連携を大事にしながら、古典の魅力およびその現代的広がりを発信していきたいと思ひます。

### 鼎談「徳川の平和」が生み出した奇想天外な武士・ 勝小吉ーなぜ今、『夢酔独言』なのかー

勝海舟の父親である勝小吉の日記『夢酔独言』をめぐる、TIRの毛丹青さん(翻訳家)、神戸女学院大学名誉教授・凱風館館長の内田樹さん及び当館の太田尚宏准教授がZOOMにて鼎談を行いました。

『夢酔独言』の中国語訳に取り組んでいる毛さんが提起した「なぜ今、『夢酔独言』なのか」という問いについて、登壇者がそれぞれの視点から迫りました。江戸後期の市井を生きた人々の群像を小吉を通して見出したいという毛さんの視線は、様々な変動に直面している今の時代にこそ大きな意味を持つのではないのでしょうか。



### トークイベント「モノガタリがよんでいる〜谷原菜摘子、 『西山物語』を描く〜」

自ら物語を詳細に設定し、それを基に作品世界を展開するというAIRの谷原菜摘子さん(画家)が、ないじえるで出会った古典籍『西山物語』のオリジナル挿絵を描き、当館の木越俊介准教授と対談を行いました。

谷原さんの手によって、挿絵のない『西山物語』がはじめて絵画化されました。その創作過程や、現代の我々にとって物語とはいかなる存在なのかなど、古くから現代まで物語の普遍的意義について、芸術家と研究者が語り合いました。



収録現場の様子。左から当館木越准教授、谷原さん、筆者

### トークイベント「一冊対談集 クリエーターと語るこの 国の古典と現代 第8回 河瀬直美×ロバート キャン ベル 家族の景色」

2022年1月31日に、映画作家の河瀬直美さんと当館のロバート キャンベル名誉教授による対談をライブ配信しました。お二人は家族の喪失や紐帯など、日本の家族像のいまむかしをめぐって語り合いました。

キャンベル名誉教授は、井原西鶴の浮世草子『世間胸算用』と、亡き妻への思いを綴った大窪詩仏の漢詩などを取り上げ、古典籍に見られる家族の様々な形を紹介し、河瀬さんが作品で扱ってこられた家や家族の問題について、古典のフィルターを通して考える贅沢な時間となりました。



(黄 昱)



## 2021 年度のアーカイブズ・カレッジを顧みて

アーカイブズ・カレッジは、新型コロナウイルス流行初年度の2020年度は長期が中止、短期は対面とオンラインのハイブリッドとなりましたが、2021年度は、長期はオンライン、短期は対面とオンラインのハイブリッドで実施しました。

感染流行2年目になると大学ではオンライン講義が定着し、社会的にも社会活動を停止しない試みが広がってきましたが、カレッジもこのような流れを受けて前年度中止となった長期コースをオンラインで開催することができたことは、今後のあり方の参考事例になったといえます（申込者は分割履修を含めて56名）。

ただし、同時にいくつかの課題も見えてきました。例えば、①各講師および受講生、または受講生間の繋がりの方が限られていて情報や現実的課題を共有できなかった、②講師が受講生の相談に乗れる機会が少なく知識や理解を深め切れなかった、③施設見学が制限されたため現場をこの目で確かめ、感覚的に理解する機会が少なかった、④実習がオンラインだったため実際にアーカイブズを取り扱う難しさが伝わりにくかった、といったことが挙げられます。

一方、短期コースは松江市市民活動センター（松江市と共催）で開催しました。すでに2020年夏に実施したクラウドファンディングで開催経費を確保していたのですが、2021年度は予

定通り実施にこぎ着けられたことは大変喜ばしいことでした。

ただ、いつ感染再拡大となるかわからない状況下でしたので、どれほど申込があるか不安でした。そのため、今回も前年度と同じくハイブリッド型を導入しましたが、予想に反してほとんどの受講生が現地会場に集まってくれました。しかも、例年よりも多くの申込みがあり、特別聴講を含めると50名（内オンライン参加は2名）にのぼりました。短期コースの申込者は近年増加傾向にありましたが、これほど反響が大きいとは正直驚くと同時に、やはり対面で学びたいという意欲が社会的に強く広まっていることを痛感しました。実際、会場では熱気が溢れ、久しぶりにカレッジの良さを感じましたし、受講生の満足度も高かったことはアンケート結果からも読み取ることができました。

人間同士の接触や実物に触れることが人間の想像力を刺激し、新しいイノベーションを生み出します。オンラインは、遠隔地からの参加が可能になるメリットもある反面、アーカイブズ学のような実学ではある種の限界があります。オンラインを併用した新しいカレッジの試みは始まったばかりです。これまでに明らかになった課題を踏まえつつ、これからもカレッジのバージョンアップを図っていききたいと思います。

（加藤 聖文）

## 総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

### 令和3年度特別講義 多田蔵人准教授「いかにして〈自己〉を語るか—国木田独歩と文例集の時代」オンラインで開催

3月25日（金）、令和3年度特別講義をオンラインで開催しました。

講師を務めた多田准教授は、近代の名文集、語彙集、作法書など、さまざまなジャンルの「文例集」と小説とのかかわりを探る研究の一環として、国木田独歩の小説『運命論者』の文体に着目し、その特徴や規則性、のちの文学への影響について、演説文例集を中心に、多岐にわたる文学作品から文体と類型を比較しながら細やかに考察されました。

今回は館内外や海外からも90名を超える申し込みがあり、当日は80名以上の方に聴講いただきました。質疑応答では、独歩作品の文体の多様な類型について多くの質問が寄せられ、聴講者の関心の高さがうかがえました。



オンラインで特別講義を行った  
多田蔵人准教授

### 児島啓祐さん、古明地 樹さんが学位取得

3月24日（木）、令和3年度春季学位記授与式が行われ、児島啓祐さんと古明地 樹さんに博士（文学）の学位が授与されました。おめでとうございます。お二人からの言葉を紹介します。

最新の専攻案内にはお二人と藤川雅恵さん（2021年9月学位取得・論文博士）にご寄稿いただきました。併せてご覧ください。

### ○児島啓祐さん（課程博士） ※第8回 SOKENDAI 賞受賞

主任指導教員の落合博志教授をはじめ、先生方のご指導のおかげで、無事に学位を取得することができました。多岐にわたる古典籍を閲覧できる国文学研究資料館の環境は博士論文執筆に大いに役立ち、現物を見ることの大切さを痛感しました。

国文学研究資料館の所蔵資料はもちろん、各地で現物を見て調査を重ねたことで、初めて得られた発見があり、今後の研究につながる視点を見出すこともできました。ありがとうございました。

※ SOKENDAI 賞・・・特段に顕彰するに相応しい研究活動を行い、その成果を優れた学位論文にまとめ、学位を取得した者を表彰するもの。

### ○古明地 樹さん（課程博士）

国文学研究資料館の豊富な古典籍資料を活用し、それらの資料に精通した先生方から指導が受けられる、ほかにはない環境で研究に専念することができました。心から感謝いたします。

日本文学研究専攻で学んだ最も重要なことは、実物資料から情報を読み取る能力です。多くの資料がデータベースで閲覧可能ですが、実際に資料に触れることでしかわからない情報があることを肌で感じました。この能力は、今後も自身の研究に新たな視点をもたらしてくれることと信じています。

（齋藤 真麻理）

## 電子展示室「和書のさまざま」のご案内

当館では、インターネットでも展示を鑑賞していただけるよう【電子展示室】を1月より公開しています。現在公開しているのは、当館展示室で定期的に開催している通常展示「和書のさまざま」の内容です。

本展示は、1200年以上に及ぶ長い歴史を持つ日本の古典書籍の「装訂」や「書型」等の基本知識を紹介するもので、資料画像に加え、解説文や解説動画を公開していますのでぜひご覧ください。ささやかながら、和書の豊かな世界への手引きとなることを願っています。

今後、「書物で見る 日本古典文学史」も公開を予定していますので、ご期待ください。

### ▶電子展示室「和書のさまざま」

<https://www.nijl.ac.jp/koten/webtenji/washosama.html>



## 国文学研究資料館賛助会の会員を募集しています

当館の事業趣旨にご賛同いただける個人・団体を対象に、賛助会（友の会）会員を募集しています。お申込みは随時受付けていますので、ご入会を希望される方はご連絡くださいますよう、お願いいたします。詳細は、以下のページをご覧ください。

▶賛助会 <https://www.nijl.ac.jp/outline/support/>



## 表紙絵資料紹介

『見立百化鳥』 宝暦五年刊 半紙本三卷三冊 【ヤ8-385-1-3】  
漕川小舟作・画 江戸 万屋彦八・泉屋平四郎版

「百花鳥」ならぬ「百化鳥」——本書は江戸時代中期、当時の身の回りにあったさまざまな事物を「木」と「鳥」に見立てた絵本である。表紙のものは、「シテワ木 謡講に生る。花は声。実は節といふ。此木四種あり。風情ある木なり」と、能の「為手」「脇」にはじまり、「花」「節」という謡曲の語を木とうまく取り合わせている。「四種」とは大和猿楽の四座（観世・宝生・金剛・金春）をいうのであろう。絵に目をやると、節博士（ゴマ点）の実（もしくは葉か）に加え、「ア」「イ」の文字、すなわち間狂言が描き込まれるところに芸の細かさが認められる。鳥の方は「一鳥」、つまり「一挺」で鼓が羽ばたき、「やあはあぼんぼんと鳴く。間のよき鳥にてよく肩にとまる。大鳥は手の下にとまる」と、小鼓・大鼓がそれぞれ生けるがごとく活写される。

このように、「〇〇鳥」「〇〇木」と懸詞により見立てられ、あくまでも木と鳥そのものに対する解説に徹しながら要所要所に言葉遊びを交えているのが読ませどころ。こうして全五十種もの組み合わせが意想外の絵とともに繰り広げられる。

作者・漕川小舟が江戸座の俳諧宗匠・山本亀成である蓋然性が高いこと、および本書に始まるバラエティー豊かな江戸の見立絵本の全体像については、中野三敏「見立絵本の系譜—「百化鳥」の余波—」（『戯作研究』中央公論社、1981）に詳しい。

右は年の瀬に大忙しの組み合わせ、「竹ぼう木」と「すゝ鳥」。ちなみに、江戸時代の煤払いは旧暦十二月十三日に行うものであった。

いずれも鳥らしく無表情で描かれているのが、かえってとぼけた味わいを醸し出しなんと微笑ましい。翌年に刊行された続編も当館に所蔵されており、ぜひ全丁をご堪能いただきたい。

（木越 俊介）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
**国文学研究資料館**  
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3  
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

国文研ニュースNo.61  
発行日 令和4（2022）年6月20日  
編集 国文学研究資料館 資源活用連携部  
製作 株式会社トリッド  
©人間文化研究機構国文学研究資料館